

はじめに

真珠湾事件は太平洋戦争のきっかけとなった歴史上重要な出来事だが、不明瞭な部分が多く、いまだに様々な憶測を呼んでいる。

本書は真珠湾事件の真相について、主に軍事面から迫ろうとするものである。本書が提案する仮説をまとめると、次のようになる。

日米開戦に際して、アメリカ軍は日本軍による奇襲攻撃を警戒していた。彼らが想定していた攻撃対象はミッドウェー島、あるいはウェーク島であり、ハワイへの攻撃は念頭になかった。そのため、真珠湾への攻撃に対して有効な対策をとることができず、戦艦 8 隻を戦闘不能にされるという大敗北を喫することになった。

アメリカ政府にとってこれは想定外の事態であり、あわてた政府高官はハワイの陸海軍司令官に責任をなすりつけ、首を切った。そして、自分たちは権力の座に座り続けた。

アメリカ政府の計画では、日本軍はミッドウェーかウェークに奇襲を行い、これを武力制圧すると予想されていた。これに対する反撃として、アメリカ軍はハワイから無傷の太平洋艦隊を出撃させ、日本軍先遣部隊を撃破する。そして、戦勝の勢いに乗ったアメリカ軍は日本列島に殺到し、一息に日本を征服する。この目的を達成するまでに、長い時間はかからないはずだった。

だが、この計画は真珠湾の敗北によって覆された。アメリカ政府は失敗にめげずに戦争を続行したが、事前の計画とは異なり、アメリカ軍が沖縄に到達するまでに 3 年の歳月を要した。さらに、アメリカ軍は沖縄戦で甚大な損害を被り、本土戦を断念せざるをえなくなった。

アメリカ政府はこの事実を糊塗し、あえて強気な態度で日本に降伏を迫った。天皇がそれに応じることで、アメリカの勝利という幻想が作り出された。現代人はこの幻想の中で生きている。

本書の目的は、人々の目を覚まさせ、現実を正しく認識させることである。

目次

はじめに	1
真珠湾.....	4
日本軍はどこを攻撃するか	4
アメリカの誤算	5
未完の野望	6
沖縄戦.....	8
嘉数高地.....	8
無謀だった本土戦.....	10
真珠湾事件陰謀説	13
ルーズベルトとチャーチルの密約	13
ハル・ノート.....	14
対米最後通牒.....	14
ハワイ軍司令官の解任問題	16
おわりに	17

真珠湾

日本軍はどこを攻撃するか

1941年12月8日、連合艦隊機動部隊はアメリカ軍真珠湾基地を奇襲攻撃した。不意を突かれたアメリカ軍はこの攻撃に対処することができず、戦艦8隻を戦闘不能にされてしまった。この日、太平洋艦隊は壊滅した。

なぜアメリカは負けたのか。なぜこれほど一方的な負け方をしたのだろうか。

この問いに答えることで、アメリカの隠された戦略が見えてくる。

軍隊は常に戦略を持って行動する。敵がこう動いたら自軍はこう動く、敵がここを攻撃してきたら自軍はここを守る、というふうに、起こりうる事態を想定して、その事態にどう対処するかを常に考えている。それが軍隊の仕事であり、その予想に基づいて、常日頃から訓練や準備を行っている。

よって、当時の緊迫した日米関係の中で、アメリカ軍は当然日米戦争を予想し、その対策を立てていたはずである。彼らが具体的にどのような戦略を持っていたかは、真珠湾事件当日のアメリカ軍の行動を見ればわかる。

そもそも、日本軍が真珠湾攻撃を計画したのは、アメリカ軍の空母を撃破するためであった。ところが、彼らがハワイに到着してみると、空母は一隻もいなかったのである。真珠湾にはエンタープライズ、レキシントンの空母二隻が停泊しているはずであったが、二隻とも不在であった。

その二隻がどこに行っていたのかというと、それぞれウェーク島とミッドウェー島に航空部隊を運んでいた。ウェーク、ミッドウェーはハワイよりも日本寄りにあり、アメリカ軍にとっては最前線の基地であった。その戦力を強化するために、空母たちは増援部隊を送り届けていたのだ。真珠湾が攻撃を受けているまさにそのときに、前線基地の戦力強化に努めていたというのだから、ずいぶん間抜けな話である。この事実、アメリカ軍がウェーク＝ミッドウェーの線を本命だと考えていたことを、我々に教えてくれる。

アメリカ軍は日本軍の奇襲攻撃を予想していた。こういうことを言うと、すぐに陰謀論だと決めつける人がいるが、そうではない。軍隊にとって、近い将来に起こりうる戦争に備えるのは自然なことであり、当時の日米関係の下では、日本軍がアメリカの領土に攻撃を仕掛けてくる可能性は十分にあった。したがって、アメリカ軍は日本軍の攻撃を予想し、対策を立てていたはずである。

問題は、日本軍がどこを攻撃すると予想していたのか、である。エンタープライズ、レキシントンの行動が教えてくれることは、アメリカ軍はハワイを攻撃される心配を全くしておらず、むしろ、より前線の基地であるウェーク、ミッドウェーへの攻撃を警戒していた、ということである。その誤算が真珠湾の敗因となった。

もちろん当時の常識では、航空機の攻撃によって戦艦が撃沈されるとは考えられなかったもので、その点でもアメリカ軍は油断していた。真珠湾以前には戦艦が最強だと信じられていたのだ。その思い込みも敗因の一つだったと言える。

アメリカの誤算

さて、以上の議論でアメリカ軍の敗因は明らかになった。彼らは日本軍がミッドウェー＝ウェークを攻撃すると思い込み、ハワイの警戒を怠った。その油断が敗北を招いた。では、なぜ彼らは日本軍の意図を推測できなかったのだろう。なぜ彼らは、ミッドウェーが攻撃されると思い込んでいたのか。

アメリカ軍が最も警戒するのは、日本軍が米本土に進攻することである。日本軍が西海岸から上陸し、アメリカを侵略することが、考えうる最悪の事態であった。したがって、彼らはその最悪の事態をどうすれば避けられるかを考えねばならなかった。

もしも、日本軍が西海岸に兵隊を輸送するとすれば、その拠点となるのはハワイ以外に考えられない。したがって、日本軍はハワイを占領することを考えるはずだ。そして、ハワイへの中継地点として、まずミッドウェーかウェークを狙うだろう。ミッドウェーを占領し、補給線を確立してからハワイを攻略する。その後、ハワイに兵站基地を築き、ようやく西海岸に進攻する準備が整う。日本がアメリカを侵略するためには、これだけの手続きが必要なのだ。よって、日本軍が先制攻撃を仕掛けてくるとすれば、その対象はミッドウェーかウェークとなる可能性が高い。

以上のような推論で、アメリカ軍はミッドウェー＝ウェークが危険だと判断したのだろう。

この推論は間違いではない。日本軍がアメリカ進攻を狙っていたとすれば、これ以外の方法はない。だが、日本軍の狙いはそこではなかった。

日本軍にとって、本当の敵はイギリスだった。アジアに植民地帝国を築いていたイギリスを打倒することが、日本の真の目標である。しかし、当時の軍部の判断では、イギリスとの単独開戦は不可能とされていた。日本とイギリスが戦端を開けば、必ずアメリカが参戦してくる。よって、まずアメリカを叩く必要がある、というところから、真珠湾攻撃が計画されたのである。

つまり、日本軍はアメリカ本土に進攻することを全く考えていなかった。イギリスとの戦いを有利に進めるために、アメリカ軍の戦力を削ぐことだけを考えていた。だから、ハワイまでの補給線を確保することなど考えずに、直接アメリカ軍の戦力を潰しに行けたのである。

アメリカ軍の想定には、日本とアメリカの二国しか現れない。日本の敵がアメリカではない可能性を考えていなかったのだ。実際、太平洋戦争においてアメリカはおまけにすぎない。この戦争の舞台はアジアであり、アジアを牛耳るイギリスこそが日本の敵であった。アメリカ人にはそれが分からず、関係のない戦争に首を突っ込んで、痛い目を見ることになった。その報復として日本にいらぬ喧嘩をふっかけたのだから、迷惑千万な話である。

未完の野望

だが、どうもそれだけではなかったようだ。アメリカ軍の予想の裏には、彼らの願望が潜んでいた。

仮に、アメリカ軍の予想通り、日本軍がハワイではなくミッドウェーに先制攻撃を仕掛けたとしよう。ミッドウェー守備隊はさほど強力ではないので、すぐに日本軍に負か

され、同島は占領されてしまうだろう。しかしこの場合、ハワイの太平洋艦隊は無傷で存在しているから、彼らが日本軍を迎撃することになる。

日本軍の先遣部隊は比較的小規模である。その小規模な戦力にアメリカ軍の主力をぶつければ、当然アメリカ軍が勝利する。すなわち、ミッドウェーを占領した日本軍を太平洋艦隊が撃退し、アメリカの勝利によって戦争の幕が上がる。この場合、奇襲部隊を撃破されることで日本軍の戦力は低下し、一方でアメリカ軍は勝利の勢いに乗っているから、アメリカは非常に有利な立場で戦いを進めることができる。日本軍撃破後、アメリカ軍がただちに日本の領土へ進攻することもありえる。小笠原諸島や沖縄は、開戦後まもなく占領されていたかもしれない。

史実では、アメリカ軍が沖縄に上陸したのは1945年4月のことである。だが、ひとつボタンを掛け違えれば、1942年に沖縄に上陸していてもおかしくなかったのだ。もしもアメリカ軍の予想が的中し、日本軍がミッドウェーに奇襲攻撃を行っていたら、時計の針は3年早まっていただろう。

これこそが、アメリカが本当にやりたかった戦争である。日本がアメリカを侵略した、ということを口実にして、逆に日本に進攻し、これを電撃的に征服してしまう。アメリカ側はこうした願望に都合がいいように、日本軍の意図を恣意的に解釈した可能性がある。

これがアメリカの陰謀であった。陰謀は失敗し、アメリカは目標を失った。ここで立ち止まることができれば、アメリカの歴史は変わったかもしれない。だが、我を忘れたアメリカ人はすべての責任を敵になすりつけ、不毛な争いを続けた。その争いの結末を、次に確認しよう。

沖縄戦

嘉数高地

アメリカ軍が沖縄本島に上陸したのは 1945 年 4 月 1 日のことであった。開戦からすでに 3 年 4 ヶ月が過ぎていた。

アメリカ軍は沖縄中部渡具知海岸から上陸し、南北二手に分かれて進撃を開始した。日本軍は南部の首里城を中心に布陣していたため、南下したアメリカ陸軍第 7、第 96 師団が最初に日本軍陣地と接触した。

4 月 8 日、嘉数高地において両軍は激突し、この戦いは 4 月 23 日まで続いた。嘉数高地は東西数キロの幅を持つ丘陵である。南から北に波が立っているような地形で、南側の傾斜はなだらかだが、北側は急な斜面になっている。沖縄には、このような形の丘がいくつも存在するという。

日本軍はこの丘の南側に陣地を構築し、いわゆる反斜面陣地を形成した。ふつう軍隊は、大砲を敵に命中させやすいように丘の頂上に陣取るのだが、反射面陣地の場合は、丘のふもとに陣地を作る。こうすると丘が遮蔽物になるので、丘の反対側から攻めてきた敵は、こちらの陣地に大砲を打ちこむことができない。無理やり大砲を使おうとすると、丘を越えるときに砲弾の軌道が弓なりになってしまい、命中精度も威力も低下する。こうして敵の砲撃を封じられることから、反射面陣地は防御戦闘において効果的とされていた。

嘉数高地には、もうひとつ別の長所もあった。この丘は北側が急斜面になっているので、戦車が丘を登れないのである。アメリカ軍は北から攻めてくるため、戦車はここで足止めされることになる。実際、はじめて嘉数高地にぶつかったとき、アメリカ軍は戦車による前進を放棄し、歩兵を丘に登らせた。彼らは夜闇を利用して頂上まで登ったが、夜明けとともに日本軍の激しい砲撃が始まり、身動きが取れなくなってしまった。退くことすらままならない激闘のなか、奇襲部隊はわずか 400 メートルの距離を 7 時間かけて、ようやく撤退したという。丘の頂上に現れた歩兵は、ふもとの日本軍砲兵から集中砲火を受け、前進を阻まれるしくみである。

こうして日本軍は、アメリカ軍の主な攻撃手段である戦車と大砲を無力化することに成功した。そして、第三の攻撃手段である空爆も、地下陣地を準備することで無力化できた。沖縄の地質は石灰岩などの堅固な地層が多く、地下 5m 以下にトンネルを掘れば、地上で 1 トン爆弾が炸裂しても崩壊することはなかった。日本軍は開戦までに必死でトンネルを掘り進め、長大な地下陣地を構築してアメリカ軍の爆撃に備えた。

日本軍は経験から学ぶことができなかった、と『失敗の本質』には書いてあるが、それは誤りである。彼らは過去の経験から学び、アメリカ軍の攻撃手段ひとつひとつに対して有効な対策を準備していた。このため、アメリカ軍は沖縄において予想外の苦戦を強いられることになった。

嘉数高地の戦いは 2 週間以上続いたが、アメリカ軍は途中 1 週間程度、戦闘を休止していた。当初予定していた以上の弾薬を消費してしまい、一時的に弾薬不足に陥ったのである。そのため、補給物資が集積するまでの 1 週間、アメリカ軍は戦闘ができなかった。この事実はアメリカ軍の補給の脆弱さ、というより消耗の早さを物語ると同時に、彼らの苦闘を証言している。

アメリカ軍は金にものを言わせた戦い方をする。武器弾薬は言わずもがな、軍艦や航空機まで無尽蔵に繰り出して、物量によって敵を圧倒する。その物量をどれだけ投入しても全く前進できないとき、彼らは疑心暗鬼にとらわれる。はたして、このまま攻撃を続けてもよいのだろうか。我々が投入した資金は、すべて敵の陣地に溶かされてしまう。このまま戦いを続けても、消耗し続けるだけだ。もっとよい攻撃手段があるのではないかと。

アメリカ軍はこのとき、南部上陸の誘惑にとらわれていた。中部海岸とは別に、沖縄南部喜屋武半島から部隊を上陸させ、日本軍を南北から挟撃するという計画である。こうすれば、北側からのみ日本軍を攻撃するよりも、効果的に敵を追い詰めることができる。分かりやすい作戦であり、成果は期待できそうであった。

しかし、上陸軍総司令官のバックナー中將はこの作戦を却下した。というのも、ただでさえ補給に困難が生じているのに、このうえ上陸地点を増やそうものなら、補給線が混乱することは必至である。それが軍にもたらす壊滅的な結果を考えると、とうてい南部上陸は許可できない、ということであった。こういう場面で踏みとどまることができ

るのは、有能な将軍の証である。ただ、これはアメリカ軍全体に言えることだが、少し慎重すぎるくらいはある。

実際、正攻法で日本軍陣地は突破できたが、嘉数高地は正面から突破されたわけではなかった。日本軍は、西海岸の伊祖城址付近をアメリカ軍に突破されたため、防衛線を維持できなくなり、嘉数高地を含む第一線陣地から戦術的撤退を行ったのである。嘉数陣地は度重なるアメリカ軍の猛攻に耐え、最後まで敵の突破を許さなかった。彼我の火力の懸隔を考えれば、これは誇るべき戦果である。

アメリカ軍には潤沢な補給がある一方、日本軍には補給の手段がない。ゆえに、戦いを続けるほど日本軍は消耗し、敗北するのは時間の問題である。しかし、その間にアメリカ軍も消耗を続け、予算を消費し続ける。その大小がじつは重要であった。

無謀だった本土戦

史実においては、日米の本格的な戦いは沖縄戦で終わった。したがって、その後に起きるはずだった戦いに注目が集まることは少ない。だが、当時のアメリカ軍にとって、沖縄は前哨戦にすぎなかった。この戦いは本土進攻の足掛かりであり、沖縄の次は九州、そして関東への上陸作戦が控えていた。この本土上陸こそがアメリカ軍の真価を試す戦いであり、沖縄はあくまでもリハーサルにすぎなかったのだ。そのリハーサルでどれだけ消耗したかが、本番を占う試金石となる。

仮に、沖縄戦で1億ドルを消費したとすれば、九州戦では5億ドルが必要になるだろう。なぜならば、九州は沖縄よりも面積が大きく、日本軍部隊も強力だからである。そして、関東上陸にはさらに数倍の予算が必要になる。沖縄戦で予算を使えば使うほど、先の戦いの見通しが厳しくなるのである。

予算だけではなく、人的な損失もアメリカにとって負担となる。沖縄戦で4万人が死傷したことを考えると、本土戦ではその10倍程度の犠牲は覚悟しなければならない。それほどの負担に国民は耐えられるだろうか。アメリカ経済は耐えられるだろうか。

本土上陸作戦には百万人単位の人員が必要となる。軍隊であるから、当然中心となるのは若くて健康な男性である。つまり、数百万の有能な労働者がアメリカ社会から引き抜かれることになるのだ。それが経済に与えるインパクトは決して小さくないだろう。

アメリカにとって、戦費の負担は重要ではない。というのも、鉄にしろ石油にしろ、戦争に必要な資源はすべてアメリカ国内で自給できるからである。したがって、いくら戦争を続けても、富が国外に流出する心配はない。問題は、軍需産業に労働力を投入することで、民需が圧迫されることである。多くの国民が兵器の製造に従事するようになると、普段の仕事ができなくなるので、国民生活が圧迫される。これがアメリカの国力を削ってゆくのだ。

もしも本土戦が現実になれば、数百万の労働者が戦争に従事することになり、アメリカ社会は深刻な労働力不足に陥る。そのうえ、彼らを運ぶ船や装備品も製造しなければならないので、民需はますます圧迫される。このころになると、ヨーロッパの戦争はすでに終わっているのに、ヨーロッパ戦線の兵力を日本戦に回すことはできる。だが、それだけでは補えないほどの消費がその後も続いたはずである。この負担にアメリカが耐えられたかどうか。

もしも真珠湾の敗北がなければ、こんなことにはならなかった。もしもアメリカ軍の狙い通り、日本軍がミッドウェー＝ウェークの線を奇襲していれば、アメリカにとって有利な形で戦争を始められたはずだ。アメリカ軍は 1942 年には沖縄に上陸して、日本側の準備が不十分なうちに本土に進攻し、日本列島を席卷することができただろう。だが、その野望はむなしく打ち砕かれた。

多くのアメリカ人は、自分たちが野望を持っていたことを知らない。そのため、自分たちが負けたことにも気付いていない。彼らは戦争において敗北したにもかかわらず、言葉巧みに人々をたぶらかし、あたかも自分たちが勝利したかのように見せかけた。しかも、彼らには嘘をついたという自覚はない。自分の嘘を自分で信じているのだ。

真珠湾事件は陰謀だったとよく言われるが、それほど単純な話ではない。次は、陰謀説の根拠とされることが多い、いくつかの事実を確認しておこう。

真珠湾事件陰謀説

ルーズベルトとチャーチルの密約

1941年8月に行われた大西洋会談の折に、ルーズベルト米大統領とチャーチル英首相の間に秘密の約束が交わされた。

その内容は、日本がアジアにおいてこれ以上侵略を進めた場合には、アメリカは対抗措置をとらざるをえなくなり、それが戦争に発展する可能性がある、と日本政府に宣言することだった。そして、アメリカと同時に、イギリス、オランダ両国も日本に対して同様の宣言を行うことが大西洋会談で協議された。ルーズベルトはこれに合意しつつも、公式発表においては軍事的な取り決めには言及しないよう、注意したという（チャールズ・A・ビーアド『ルーズベルトの責任』）。

以上のことは、1945年にアメリカ連邦議会で開かれた真珠湾委員会において明らかにされたことである。公式声明には表れていないが、英米両首脳は、日本に対して協調して軍事行動を行うことを約束した。しかしながら、これは日米の軍事衝突を避けるためのものではなかった。というのも、大統領はこのとき、「これで日本の武力侵略を30日間先延ばしにできる」と述べているからである。つまり、9月以降に武力衝突が起きることを念頭に置いた約束であった。

また、アメリカ軍が北大西洋に位置するアゾレス諸島を占領することに関しても、両首脳間で合意がなされた。アゾレス諸島は中立国ポルトガルの領土であったが、これをドイツの侵略から守るために、アメリカ軍を派遣することを約束したのである。大西洋憲章の裏では、軍事的な問題に関する種々の合意が行われていた。

ルーズベルト大統領は、日本やドイツと戦争を行うことを前提としてチャーチル首相と約束を交わした。これは、アメリカ政府に日本と戦争を行う意思があったことを意味している。では、その目的は何だったのか。

一説には、「裏口からの参戦」が目的だったという。アメリカの目的はヨーロッパの戦争に参加することであり、その口実として日本と戦争を始めようとした。というのも、

日本はドイツ、イタリアと三国同盟を結んでいたもので、日本と戦端を開くことで、アメリカはなし崩し的にヨーロッパの戦争に参加することができる。そのために、わざと日本軍に奇襲攻撃を行わせたのだ、という説である。

しかし、この主張は妥当性が低い。なぜならば、真珠湾におけるアメリカ軍の損害が大きすぎるからである。ヨーロッパの戦争に参加するための代金として、戦艦8隻は高額すぎる。ゆえに、この場合でも、アメリカ側は真珠湾を攻撃される可能性を考慮せずに、ミッドウェー＝ウェークへの奇襲を信じていたことになる。したがって、真珠湾事件が陰謀だったとは言えない。

一方で、アメリカ政府がヨーロッパへの参戦を希望していた可能性もなくはないと思う。そのために日本軍に奇襲攻撃を行わせた、という点に関しては、別の角度から検証する必要がある。

ハル・ノート

ハル・ノートは日本を挑発するためのものだった、という意見がある。この外交文書が挑発を目的としたものだったかどうかは、はっきりと言うことはできないが、少なくとも、この時点におけるアメリカ政府の態度を率直に表明したものだと言える。

それは、日本に対して譲歩するつもりはないという意思表示であり、戦争の可能性を考慮に入れた通告である。日本政府がハル・ノートに示された中国からの完全撤退という条件を承諾すると、アメリカ政府が本気で考えていたはずはない。戦争の準備もせずにこのような外交を行うとは考えにくいので、アメリカ政府は何らかの戦略をもってこの文書を起草した、と私は推測する。その戦略は上に述べたとおりである。

対米最後通牒

日本政府は真珠湾攻撃の前日、駐米日本大使館に「対米覚書」を電信した。日本大使は事件当日正午にアメリカ政府にこの文書を手渡しに行ったが、アメリカ側の対応が遅れ、文書が手渡されたのは正午過ぎになった。日本側としては攻撃と同時に文書を手渡

すつもりだったが、攻撃開始 15 分後に手渡すことになってしまい、これが「だまし討ち」の印象を強める一因となった。

一方で、アメリカ政府は日本外務省の使用する暗号を解読し、日本の機密文書を極秘に入手していた。これはアメリカ政府内部でマジック情報と呼ばれ、重要な情報源になっていたという。当然ながら、日本側が駐米大使に送った「対米覚書」も即座に解読され、アメリカ政府に供されることとなった。したがって、アメリカ政府は真珠湾事件発生の前日には、「対米覚書」の内容を知悉していたと考えられる。

「対米覚書」がどのような文書であるかは、インターネットで検索すれば出てくるので、ぜひ確認していただきたい。この「覚書」には最後通牒という単語も、宣戦布告という単語も使われていないので、最後通牒でも宣戦布告でもない、と主張する人がいる。それが詭弁にすぎないことは、この文書を読んでもみればすぐにわかる。

これは果たし状以外の何ものでもない。相手の非をあげつらい、罪を数え、不正を糾弾し、怒りをぶつける。最後に来るべき「よって汝らに天誅を下す」という一文が抜けているため、たしかに形式は整っていないが、どこからどう読んでも普通の外交文書ではない。そもそも外交においては、本音を言うことはタブーである。自分の本心を押し隠して相手に同調し、妥協点を探るのが外交であって、この文書のように相手の非を一から十まで指摘するようなことは通常的外交では決してありえない。つまり、この文書は外交文書ではなく、外交の不可能性を告げる文書である。ゆえに、最後通牒と解釈するのが正しい。

そして、その程度のことがアメリカ政府に分からないはずはない。彼らはそれが最後通牒だと分かった上で、あえて何もしなかったのである。アメリカ政府が「対米覚書」を入手してから真珠湾事件が発生するまで、12 時間以上の猶予があった。その間にアメリカ軍に対して適切な命令を出しさえすれば、真珠湾事件は防げたはずである。たとえば、前線基地に第一種戦闘配置を命令するなど、いくらでもやりようはあったはずだ。にもかかわらず、アメリカ政府が何のアクションも起こさなかったということは、そこに何らかの思惑があったと考えるべきである。

その思惑とは、日本軍の奇襲攻撃を成功させたかった、ということである。もしもアメリカ軍基地が警戒態勢をとっていたら、日本軍は奇襲失敗と判断して引き返してしま

うかもしれない。そうなる戦争が始まらないので、日本軍に奇襲攻撃をさせて、戦争を始めるために、あえてアメリカ軍に警戒態勢をとらせなかったのである。

それでも十分に勝てる、という見込みがアメリカ政府にはあった。なぜならば、日本軍が攻撃するのはミッドウェーのはずだったからである。その思い違いが太平洋艦隊を潰滅に追いやった。

ハワイ軍司令官の解任問題

真珠湾事件に関連して、不幸な事件が起きた。

1941年12月16日、太平洋艦隊司令長官ハズバンド・E・キンメル大将とハワイ陸軍司令官ウォルター・C・ショート中将は、それぞれ司令官の任を解かれた。そして42年1月、大統領が組織した調査委員会は、両司令官の職務怠慢が真珠湾事件の原因であると報告した。同年2月、ショート中将とキンメル大将の退役が発表された。一方で、政府高官の責任は追及されなかった。

これは明らかにトカゲのしっぽ切りである。真珠湾事件の責任は100%アメリカ政府にあるが、彼らはその責任を現地司令官になすりつけたのだ。

しばらくのち、日本軍がインパール作戦に敗北した際、作戦を指揮した牟田口廉也中将は内地に帰還し、陸軍予科士官学校の校長に就任した。この温情人事と比べると、アメリカ軍の人事はいたって冷酷である。これもシビリアン・コントロールの賜物だろう。

真珠湾事件に関しては他にも様々な疑惑があり、憶測があるが、これくらいでやめておこう。

おわりに

本書では、軍事面から見た真珠湾事件の実態について、著者の意見を解説した。筋の通った推論になっていると自負する。

著者が強調したいのは、日本軍は強かった、ということである。彼らは戦略においても戦術においても、アメリカ軍を凌駕していた。ただ、資金面で心許ないところはあったが、決して武勇において後れをとったわけではない。

もちろん、武勇などといっても、いまの日本人には理解できないだろう。欲望に流されることに慣れきった現代人にとって、この言葉はおとぎ話のように聞こえるに違いない。己を律する克己心こそが武士道であり、軍人にとって不可欠の素養であるのだが、いやはや、我々は遥か遠くに来てしまったようだ。

大和魂とは真実を受け入れる知性である。その心をどうか思い出してほしいと思う。